

源師房「初冬、扈從行幸、遊覽大井河。応製和歌」序注（上）

A Commentary on Minamoto-no-Morofusa's "Preface to His *Waka* Poem Composed for the Imperial *Waka*-making Party While the Emperor and His Entourage Were Traveling around Oi River in Early Winter"——(1)——

鈴木 徳男

北山 円正

延久四（一〇七二）年十二月に踐祚した白河天皇は、四年後の承保三年十月二十四日に大井河行幸を行う。天皇は、まだ二十四歳の若者であり、摂関勢力に対抗して親政を推し進めようとしていた時のことであつた。この行幸は自ら発意したものであり、その規模は諸資料によればかなり大きかつたようである。強大な皇権を内外に示そうとする意図を看取してよいだろう。間もなく院政が本格化しようとする、平安時代後期政治史における意義を認めうるとともに、和歌史上においても、この大井河行幸は重要な位置を占めると見られる。大井河行幸の前年つまり承保二年、天皇は近臣である蔵人藤原通俊に勅撰集撰進を下命している（『後拾遺集』仮名序・「後拾遺和歌抄目錄序」）。三番目の勅撰和歌集『拾遺集』撰進からおよそ七十年を経た頃のことである。天皇は、これまで摂関家が主導して行われてきた和歌を中心とする文事を、天皇及びその周辺に取り戻そうとしていたようである。治世初期に天皇を中心とした文事の隆昌を図ろうとする意図が窺える。すでに撰集を近臣に命じていた承保三年十月、大井河行幸において催す歌会は、勅撰集を意識したものとなるだろう。これから活発となる白河天皇の和歌活動の初期に位置するとともに

に、院政期和歌の始発を告げる催しでもある。

この大井河行幸の様子は、種々の資料に記録されている。『扶桑略記』『帝王編年記』などの史書はもとより、『助無智秘抄』『柱史抄』などの故実書、『中外抄』『十訓抄』などの説話集、歴史物語『今鏡』にも、編者・著者の目的・関心に応じてその一こまが記されている。また、勅撰和歌集『後拾遺集』がその折りの和歌を収載しているのは、生の記録として貴重である。そんな中であって、詳細に行幸のありさまを述べ、雰囲気をも伝えるのは、歌会を催した時に源師房が書いた和歌序（『本朝統文粹』巻十所載）である。これは、行幸に随従した一官人が、実施に到る経緯も含めて、自らの見聞をもとにして草した一文である。序の常である文飾を多分に含むとは言え、当事者の記録として尊重してしかるべきである。橋本不美男『院政期の歌壇史研究』や上野理『後拾遺集前後』など、この行幸及び歌会の意義を問う研究では、必ずこの和歌序を取り上げ、重視して扱っている。和歌序の重要性を認識すればこそである。ただ、目下序の注解という面では、考究が十分ではない憾みがある。そこで本稿では、用例を踏まえて訓むことに主眼を置きながら読解を試み、その過程で見出した問題に検討を加えることとする。

序の本文は、内閣文庫本（内閣文庫発行の複製本）を用い、蓬左文庫本（蓬・明治二十九年発行の版本（版））によって適宜校訂を行った。まず全文を掲出する。それに句読点を付し、対偶を明らかにするために該当部分を二行書きにして、その頭に括弧をつけた。また便宜上、(1)から(7)の段落に分けている。本文中の＊印は校訂した箇所を示している。各語注においてその理由を述べた。段落ごとに、まず訓みを示し、次に語注を行って用例を挙げ（○印以下に引く）、その上で現代語訳を記す。最後に、本稿末尾に「付説」を設け、問題点等を指摘して意見を述べた。

初冬扈從行幸、遊覽大井河。応製和詞一首。井序

從一位行右大臣兼左近衛大将皇太弟傳臣源朝臣師房上

- (1) (金商告謝、風雲凝寒色、玄陰肇来。林叢留秋荣。聖上 当令節之蕭索、訪佳境之幽深。)
- (2) 命関白左丞相曰、伝聞、天下勝地者、莫過大井河、暫乘一朝之余暇、雖有前鑑、奈荒榮何。城中名区者、未若嵯峨野。欲専四面之眺臨。
- (3) 勅命未畢、臣応如先。黄軒洞庭之遊、皆載典章、誰言荒榮。請 占行宮於山辺、今日良宴、蓋在于斯也。夏后会稽之会、
- (4) 夫 鳳輦漸揺、境近都城、故無車馬之費、況乎 瑠館駐輿、青苔纈沙、似施綺席於洲渚、而泛然、傍奇巖仰崇岫、鹿鳴混伶倫之曲、華船移蹕。紅葉瀉水、如濯貝錦於江波。加以 後沿下流而容与。棹迅瀨翫激湍、漁火代官人之燈。
- (5) 既而 驚皇歛之無猷、山嵐頻報、入聞者万歳之声、而華蓋而欲帰。河水一清、滿眼者千秋之色。山水嘉貺、誠有以哉。
- (6) 鵷群乗酔、各相語曰、瑤池周穆之昔、策駿馬而無所休、豈如我君 高追延長之旧則、汾河漢武之秋、携佳人以不能忘。遂因酒盃之蕩情、重開承保之新儀。
- (7) 如臣者、忝蒙明詔、慙抽鄙懷。所愧 當時無采、後代貽嗤。正課筆硯而述志。其詞曰、

初冬行幸に扈從して、大井河を遊覽す。製に應ずる和詞一首。并せたり序

【本朝統文粹】卷十・和歌序

(1) 金商謝を告げ、玄陰肇て来る。風雲に寒色凝り、林叢に秋榮留まる。聖上令節の蕭索なるに当たりて、佳境の幽深なるを訪ふ。

從一位行右大臣兼左近衛大將皇太弟傳源朝臣師房上る

歌会記録の端作と序者の位階・官職・姓名、そして序の冒頭に、冬が到来して天皇の行幸があつたことを述べる。

「初冬」は、冬の初め、十月。

○「初冬。從幸漢故青門。應制」（初唐沈佺期、詩題）

○「初冬。泛大井河、詠紅葉蘆花和歌序」（『本朝文粹』卷十一、源道濟、歌題）

「扈從」は、天子のお出かけに付き從う。『文選』（卷八）司馬長卿「上林賦」の「扈從橫行、出乎四校之中」（李善注「晉灼曰、扈大也。張揖曰、跋扈縱橫、不案鹵簿也」。五臣注「謂大衆從君也」）は、天子のお出かけに隨行する人。天子に隨行する意の例には次がある。

○「扈從幸韋嗣立山莊。應制」（盛唐張說、詩題）

○「扈從梵釈寺。應製」（『文華秀麗集』卷中、大伴親王（淳和天皇）、詩題）

「行幸」は、天子が宮城の外へ出かけること。

○上行。幸河東、祠后土（『文選』卷四十五、漢武帝「秋風辭」序）

○「行幸後朝、憶雲林院勝趣、戲呈吏部紀侍郎」（『菅家文章』卷六、詩題）

「遊覽」は、外出してあちらこちらを見物すること。

○涉青林以游覽兮、樂羽族之群飛（『文選』卷九、潘安仁「射雉賦」）

○「暮春陪都督大王、遊覽法興院、同賦庭花依旧開。應教」（『本朝麗藻』卷上、源道濟、詩題）

「大井河」は、丹波山地から亀岡を経て、洛西嵐山へ流れ出る川。嵐山の麓あたりの流域は、歌枕として知られている。平安時代貴族らがしばしばこの辺りで遊んでいる。なかでも延喜七（九〇七）年九月の宇多法皇大井河御幸は有名で、白河天皇の行幸の先蹤である。

○「暮秋泛大井河、各言所懷和歌序」（『江吏部集』卷中、歌題。『本朝文粹』卷十二）

○「初冬於大井河、翫紅葉和歌」（『本朝統文粹』卷十、藤原国成、歌題）

「応製」は、みことのりに応えて詩文・和歌を作ること。唐の時代には「応制」を用いるのが普通。

○「春日芙蓉園侍宴。応制。」「幸少林寺。応制。」（初唐宋之間、詩題）

○「九月九日、侍讌神泉苑。各賦一物、得秋蓮。応製。」（『凌雲集』、良岑安世、詩題）

○「暮春侍中殿、詠竹不改色。応製和歌一首」（『本朝統文粹』卷十、源俊房、歌題）

「并序」は、序を加える意。ここでは、歌会の序を付け加える。「序」は、作品成立の経緯や意図などを述べる文体の名称。この序は、歌会の序。遊覧を行うまでのいきさつから、大井河での歌会までの模様を記している。詩会での例には、「晦日宴高氏林亭并序」（初唐陳子昂）・「早春内宴、侍仁寿殿、同賦春娃無氣力。応製一首并序」（『菅家文草』卷二）などがある。

○「梅花歌卅二首并序」（『万葉集』卷五、題詞）

○「春日住吉行旅述懷。応太上皇製和歌一首并序」（『扶桑古文集』、源経信、歌題）

は、歌会での例。ここまでが端作。この白河天皇の行幸は承保三（一〇七六）年十月二十四日にあった。『扶桑略記』には、

○関白左大臣、引率公卿、向大井河、令点定行幸頓宮（十月十二日）

○行幸大井河。御鷹逍遙也。公卿侍臣等、皆以供奉。右大臣源朝臣師房、述和歌序。出居式部卿敦賢親王、参

於御船、列大臣座之上。但馬守源高房、於桂河梅津辺、作御在処矣（十月二十四日）

とある。藤原師実を中心に行幸の準備が進められていたこと、鷹狩りを中心とした、公卿侍臣が挙つて供奉する盛大な催しであつたことなどが分かる。

つづいて序者の位署・姓名が記される。序を書いたのは源師房（一〇〇八一—一〇七七）。師房が「従一位」に叙せられたのは、延久六年正月廿八日（『公卿補任』）。「行」は、位に官が相当せず、位相当より低い官に就いている場合、官位を記す時に位の名と官の名との間に置く語。北山「藤原敦光「白居易祭文」注釈」（「神戸女子大学文学部紀要」第三十五巻）参照。「右大臣」は、左大臣とともに太政官の長官であり、行政上の責任者。左大臣を上位とする慣行はあるが、職掌は同じ。『令義解』（巻一・職員令）には、「左大臣一人へ掌、統理衆務、挙持綱目、惣判庶事。彈正糾不當者、兼得彈之、右大臣一人へ掌、同左大臣」とある。補せられたのは、治暦五（一〇六九）年八月廿二日（『公卿補任』）。「兼」は、兼官（前記北山拙稿参照）。「左近衛大将」は、左近衛府の長官。近衛府は、天皇身邊の警護に当たる令外の官。『統日本紀』天平神護元（七六五）年正月三日の条に、「改授刀衛、為近衛府。其官員、大将一人、為正三位官……」とある。「皇太弟傳」の「皇太弟」は、皇太子で天皇の弟である人。この「皇太弟」は、白河天皇の異母弟である実仁親王（一〇七〇—一〇八五）。『日本書紀』（天武天皇元へ六七二）年五月）に、「亦命菟道守橋者、遮皇太弟宮舍人、運私糧事」、「凌雲集」の嵯峨天皇詩題に「夏日皇太弟南池」とある。「傳」は、東宮の職員で皇太子を輔導する官。『令義解』（巻一・東宮職員令）に、「傳一人へ掌、以道德輔導東宮」とある。『統日本紀』（宝龜十へ七七九）年十二月）に、「（藤原）繩麻呂……宝龜初、拜中納言、尋兼皇太子傳・勅旨卿」、「日本後紀」（大同元へ八〇六）年閏六月）に、「今山陽道觀察使參議正四位下守皇太弟傳藤原園人言」とある。師房が「左近衛大将」「皇太弟傳」に補せられたのは、ともに承保二年十二月十五日（『公卿補任』）。「源朝臣師房」は、村上天皇の皇子である具平親王の男。村上源氏の祖。藤原頼通の猶子となり、また藤原道

長の女尊子の婿ともなっており、撰閑家との結びつきが強い。当時を代表する政治家であった。詩歌の道に長じており、のちに大江匡房は、「源大相国、風月之主、社稷之臣也」(『本朝統文粹』卷十一、「暮年詩記」)。「朝野群載」卷三二と讃えている。極官はこの和歌序の位置の通り。大井河行幸の翌年二月十七日に薨じている。その生涯については、片山剛「源師房序説―後期撰閑時代の変奏―」(古代学協会編『後期撰閑時代史の研究』所収)が詳しく述べている。姓名の後に小字で記した「上」は、白河天皇に奉獻することを意味する。

○従五位上左馬頭兼内藏頭美濃守臣小野朝臣岑守上。(『凌雲集』序)

○従五位下守大舍人頭兼信濃守臣仲雄王上。(『文華秀麗集』序)

○東宮学士従五位下臣滋野朝臣貞主上。(『経国集』序)

と、勅撰漢詩集はいずれも序の作者の姓名に続いている。歌会の序の場合はこの体裁に倣ったものであろう。

○参議正三位行右大弁兼侍従美作権守藤原朝臣行成上。(『本朝小序集』「冬日侍宸宴言」志和歌」序)

○参議従二位大藏卿兼左大弁中宮権大夫播磨権守源朝臣経信上。(『本朝統文粹』卷十、「春日住吉行旅述」懷。応太

上天皇 和歌」序)

○内大臣正二位兼行右近衛大将臣源朝臣有仁上。(『扶桑古文集』「春日侍太上皇幸白河院翫花。応製和歌」序)

次に序の本文(1)。「金商」の「金」は、五行の一つ。四季では秋に当てる。「商」は、五音の一つ。五行では秋に当てる。したがって「金商」は秋の意。

○金商七月之候、銀漢二星之期。(『本朝麗藻』卷上、大江以言「七夕於秘書閣、同賦織女雲為衣。応製」序。

『本朝文粹』卷八)

○函夏艾安之時、金商清涼之候。(『本朝統文粹』卷十、藤原明衡「秋夜詠月照松和歌」序)

「告謝」は、去る、別れを告げる。秋が去り行く。対をなす「肇」とともに、次に引く「射雉賦」に基づく。

○青陽告_レ謝。朱明肇_レ授。〔文選〕卷九、潘安仁「射雉賦」。李善注「楚辭曰、青春受_レ謝。王逸曰、謝去也」。五臣注「春為青陽、告_レ謝為春終也。夏為朱明。肇始也。始授謂夏初也」

〔玄陰〕は、冬、冬の氣。

○玄陰凝不_レ味其潔、太陽曜不_レ固其節。〔文選〕卷十三、謝惠連「雪賦」

○赤日旱天長看_レ雨、玄陰臘月亦聞_レ雷。〔白氏文集〕卷五十八・2861、「題平泉薛家雪堆莊」。『千載佳句』上・地理部・泉

○金石糸竹之韻、清脆於素商之終、吳蔡齊秦之聲、幽咽於玄陰之始。〔本朝統文粹〕卷一、大江匡房「落葉賦」

〔肇〕は、「射雉賦」の五臣注に言うとおり、始めての意。『篆隸万象名義』（第五）・『新撰字鏡』（卷十）には、ともに「始也」とある。

○庠序肇興、儀形_ニ國青。〔文選〕卷六十、任彦昇「齊竟陵文宣王行狀」

〔風雲〕は、風と雲。

○珍怪麗_{フツギナ}奇隙充、徑路絶風雲通。〔文選〕卷五、左太冲「吳都賦」

○風雲易向人前暮、歲月難從老底還。〔和漢朗詠集〕卷上・歲暮、惟良春道

〔凝〕は、こり固まっている、はり付いている。〔風〕と〔雲〕に「寒色」がへばりついている。〔寒色〕がくつきりと表れている。

○桑柘凝_ニ寒色、松篁暗_ニ晚暉。〔李嶠百廿詠〕・〔煙〕

○紅凝舞袖急、黛慘歌聲緩。〔白氏文集〕卷六十一・2975、「山遊示小妓」

○玉鏡沈_ニ景、与_ニ止水而可鑑、金波凝_ニ色、混細浪而難分。〔本朝文粹〕卷八、三善清行「八月十五夜、同賦」

映池秋月明」序

「寒色」は、寒々とした色。冬らしさを示す色である。

○毎看風霜之寒色、不堪幽閑之虚懷（『本朝文粹』卷十、紀長谷雄「九日後朝、侍宴朱雀院、同賦秋思入寒松。応太上皇製」序）

○栖葉清光迎日媚、封枝寒色与雲深（『類聚句題抄』、菅野名明「山明望松雪」）

「林叢」は、草木の茂ったところ、林と草むら、藪。

○山谷為之風森、林叢為之生塵（『文選』卷八、楊子雲「羽獵賦」）

○秋過物色変林叢、興味自催在此中（『江吏部集』卷上、「初冬感興」）

○台殿究巧、林叢韜奇（『扶桑古文集』、藤原実光「秋日侍太上皇仙洞、同詠菊送多秋。応製倭歌」序）

「秋榮」は、秋の花。

○涼葉照沙嶼、秋榮冒水潯（『文選』卷三十一、江文通「雜體詩三十首」ノ「謝光祿郊遊莊」）

○秋淺菊雖無發榮、蕙蘭衰後遂彰貞（『法性寺殿御集』、「秋菊有貞心」）

冬になっても「林叢」には秋の花がなお留まっている。風と雲には「寒色」つまり冬の色が窺えるのと対をなす。

「聖上」は、天皇。天皇は白河天皇（一〇五三—一一二九。在位は一〇七二—一〇八六）。後三条天皇の第一皇子。

諱は貞仁。この行幸の時は、即位四年後。『拾芥抄』（中本・官位唐名部）に、「帝王 天子、皇帝、主上、天皇……聖上」とある。

○方今聖上、同天号於帝皇、掩四海而為家（『文選』卷二、張平子「西京賦」）

○聖上出彼九重之城闕、幸此仙洞之幽奇（『本朝統文粹』卷九、大江隆兼「暮春於秘書閣、同賦楚庭松表貞詩」序）

「令節」は、よき時節、佳節。

○偶因令節。会嘉賓、況是平生心所親（『白氏文集』卷六十六・3259、「酬鄭二司録与李六郎中、寒食日相遇同宴見贈」）

○在此令節、縦以宴遊（『本朝文粹』卷十一、紀長谷雄「九日侍宴、觀賜群臣菊花。応製」序）

○当十月之令節、命一日之歎遊（『扶桑古文集』、大江匡房「冬日同詠松影浮水。応太上皇製和歌」序）

「蕭索」は、物寂しいさま。

○其為狀也、散漫交錯、氣氤蕭索（『文選』卷十三、謝惠連「雪賦」）

○寒林蕭索、落葉紛飛（『本朝文粹』卷十、慶滋保胤「冬日於極樂寺禪房、同賦落葉声如雨」序）

○蓋遇四瀛之艾寧、賞三秋之蕭索也（『本朝統文粹』卷十、藤原明衡「秋夜同詠華菊臨水。応教和歌」序）

「佳境」は、景色のよいところ、風情ある土地。

○洛中佳境、應無限、若欲諳知問老兄（『白氏文集』卷六十九・3552、「和敏中洛下即事」）

○洛陽城中、有一佳境（『本朝文粹』卷八、大江匡衡「夏日陪左相府書閣、同賦水樹多佳趣。応教」序）

「江吏部集」卷上は、「勝境」に作る）

○天下佳境、雍州為最（『本朝統文粹』卷九、藤原敦宗「初冬於仙院書閣、同賦仙洞多松竹詩」序）

「幽深」は、奥深いさま。

○活計縦貧長浄潔、池亭雖小頗幽深（『白氏文集』卷五十七・2776、「偶吟一首」ノ二）

○干穹蒼而独秀出、凝積翠以常幽深（『経国集』卷十四、良岑安世「雜言奉和太上天皇青山歌」）

○人者誇於天才之卓犖、亭者称於地勢之幽深（『本朝文粹』卷十、源順「初冬過源才子文亭、同賦紅葉」序）

序）

白河天皇は、よき時節を迎えて佳景の地を訪れた。

(現代語訳)

秋が別れを告げて、冬がやって来た。風と雲には寒々とした色がくつきりと現れており、林や草むらには秋の花が留まっている。主上は、よき季節のものの寂しげな時に当たって、すばらしい景色の所の奥深さを訪ねて行かれる。

- (2) 関白左丞相に命せて曰はく、「伝へ聞く、天下の勝地は、大井河に過ぐる莫く、城中の名区は、未だ嵯峨野に若かずと。暫らく一朝の余暇に乗じて、四面の眺臨を専らにせむとす。前鑑有りと雖も、荒楽を奈何にせむ」といふ。

天皇が関白左大臣藤原師実に対して、大井河・嵯峨野への出遊を希望するものの、浪費に走り遊楽に耽るのではないかと危惧を告白している。「命」は、おおせになる。「関白」は、天皇を補佐してすべての政務を執り行う官職。「左丞相」は、左大臣。『拾介抄』(中本・官位唐名部)に、「左大臣 左丞相、左僕射、左府」とある。職掌は右大臣に同じ。先の源師房の位署「右大臣」参照。大井河行幸があつた承保三年十月における「関白左丞相」は、藤原師実(一〇四二—一一〇二)。師実の関白と左大臣の補任は、それぞれ承保二年・延久元(一〇六九)年(『公卿補任』)。「伝聞」は、伝え聞く、耳にする。この語から「奈荒楽何」までが天皇の言葉。

○鄙生乎三百之外、伝聞於未聞之者(『文選』卷二、張平子「西京賦」)

○伝聞魯人浮東海、見仲尼及七十子遊海中(『本朝文粹』卷九、大江澄明「仲春積奠、聴講古文孝經、同賦」)

夙夜匪懈「序」

「天下」は、一國のうち、國中。

○瞿唐天下。陰、夜上^{ノボルハ}。信難哉（『白氏文集』卷十八・1109、「夜入瞿唐峽」）

○雲林院西洞、天下奇地也（『本朝麗藻』卷下、源道濟「冬日於雲林院西洞、同賦境靜少人事詩」序）

「勝地」は、景勝の地、風景のすぐれた土地。

○頭陀寺者……信楚都之勝地也（『文選』卷五十九、王簡棲「頭陀寺碑文」）

○歳光時物、好^レ事者賞而可^レ憐、勝地良遊、相遇者懷而忘^レ返（『懷風藻』、下毛野虫麻呂「秋日於長王宅、宴新羅客」序）

○恋尊閭之遺德、慕勝地之旧遊（『本朝文粹』卷十一、源順「秋日遊白河院、同賦秋花逐露開」序）
「莫過大井河」は、大井河にまさる地はないの意。「城中」は、京城のうち、洛中。

○二月平阜春草淺、千乘犯曉出城中（『凌雲集』、淳和天皇「奉和春日遊獵、日暮宿江頭亭子。応製」）

○色異常花、艷勝他樹。誠是城中第一者耶（『本朝文粹』卷十、藤原篤茂「仲春於左武衛將軍亭、同賦雨來花自濕」序）

「名区」は、名勝の地、名所。

○惟此名区、禪慧攸託（『文選』卷五十九、王簡棲「頭陀寺碑文」）

○鳥羽勝境者、象外名区也（『扶桑古文集』、藤原宗兼「春日於鳥羽院直廬、同詠松為久友和歌」序）

○誠是天下之勝境、象外之名区也（『本朝統文粹』卷九、藤原実綱「暮春侍行幸白河院、同賦水上落花輕。応製詩」序）

嵯峨野「序」

「嵯峨野」は、山城国葛野郡の平安京西北郊の丘陵地。貴族らの遊覧の地であり、別業が数多く営まれた。詩題に

は、「嵯峨野秋望」(『江吏部集』卷上。『和漢兼作集』卷七、藤原為時)、歌題には、藤原国成「秋日於嵯峨野、尋虫声和歌」(『本朝統文粹』卷十)などと見える。

○嵯峨野亭、其地勝絶、甲於城外之山庄。(『雲州往来』中本)

○嵯峨野之花、大井河之月、尤可被賞翫歟(同中末)

「未若嵯峨野」は、嵯峨野に及ぶ所はないの意。

「乗一朝之余暇」は、ある一日の休みを利用しての意。「乗」は、ここでは……を使つて、利用しての意。

○銷憂乘暇日、誰識仲宣才(『李嶠百廿詠』、「楼」)

○聊乘休仮景、入苑望青陽(『懷風藻』、葛野王「春日翫鶯梅」)

○当三月之閑余、乘五日之休暇(『本朝麗藻』卷下、大江以言「三月尽日、陪吉祥院聖廟、同賦古廟春方暮。各分字詩」序。『本朝文粹』卷十)

「一朝」は、ある日。

○一朝得謁大明宮、歎呼拜舞自論功(『白氏文集』卷三・0140、「馴犀」)

○一朝焼滅旧経営、苦問遺孤何処行(『菅家文草』卷二、「路次觀源相公旧宅有感」)

「余暇」は、休暇、休日。

○飽餐仍晏起、余暇弄龜兒(『白氏文集』卷十六・0920、「官舎閑題」)

○寛平聖主、萬機余暇、拳宮而方有^{マサニ}事^{サシ}合^{サシ}歌(『新撰万葉集』卷上・序)

○乘^{マサニ}閨月之余仮、策浮雲而放遊(『本朝統文粹』卷十、藤原実範「殿上花見」和歌序。『朝野群載』卷一)

「專四面之眺臨」は、ひたすら周囲を眺望するの意。「專」は、もっぱら……する。……ばかりする。

○「自到郡府、僅經旬日、方專公務、未及宴遊……」(『白氏文集』卷五十四・2422、詩題)

○花序昔專。蘭省侍、烟波今累竹符行（『田氏家集』卷之上、「奉饒紀大夫累出刺肥、聊因詩酒。各分一字、得行」）

「四面」は、あたり一带、周囲、四方。

○群氏如蟬毛、而起四面、雨射城中（『文選』卷五十七、潘安仁「馬汧督諫」）

○錢塘湖上白沙頭、四面茫茫樓殿幽（『本朝麗藻』卷下、藤原公任「同諸知己錢塘水心寺之作」）

「眺臨」は、風景を眺めること、眺望。「臨眺」に同じ。

○即事既多美、臨眺殊復奇（『文選』卷二十一、沈休文「鍾山詩、応西陽王教」）

○從來多古意、臨眺独躊躇（盛唐杜甫「登兗州城樓」）

○蕭寺上方好眺臨、人實自隔動春心（『中右記部類』卷九紙背漢詩、藤原宗仲「春日遊長樂寺即事」）

右の第二・三例のように、高いところから眺める意の場合が多いが、ここはそうとも言えない。たんに眺め渡すと解しておくのがよいだろう。

○「秋夕南池亭子臨眺」（『文華秀麗集』卷上、大伴親王（淳和天皇）、詩題）

○從卜吾廬好眺臨、地形卑湿一郊林（『本朝無題詩』卷一、藤原敦基「有田家。主客會談、恣以逍遙……」）

白河天皇は、万機の余閑の一日、景勝の地として知られる大井河・嵯峨野への遊覽を望んでいた。

「前鑑」は、先人の残した手本、先人の失敗に基づく戒め。

○此皆前鑑之驗、後事之師也（『文選』卷四十三、孫子荊「為石仲容、与孫皓書」）

○前鑑不遠、覆車繼軌（同卷五十三、李蕭遠「運命論」。李善注「毛詩曰、殷鑑不遠。晏子春秋、諺曰、前車覆、後車戒」）

○前鑑不遠、後悔可思（『本朝文粹』卷四、大江匡衡「入道大相国、謝官文書内覽表」）

「奈何」は、どのようにすればよいのか。扱いに苦慮するさまを言う。

○少壯幾時兮奈老何（『文選』卷四十五、漢武帝「秋風辭」）

○明其無^レ可^レ奈何[〃]、識其不^レ由[〃]智力[〃]（同卷五十四、劉孝標「弁命論」。李善注「莊子曰、知^レ不^レ可^レ奈何[〃]、而安^レ之若^レ命、唯有德者能之[〃]」）

○於此而不^レ勉、其奈[〃]後悔何（『本朝文粹』卷十、紀齊名「暮春勸学会、聴講法華經、同賦撰念山林」序）

○白雲黃竹歌声動、一人荒[〃]樂萬人愁（『白氏文集』卷四・0160、「八駿図」）

右の白詩は、周の穆王が八頭の駿馬を駆つて思うがままに遊び回つたために、民が愁えた例を引いて、天子への戒めとしている。その穆王の逸遊を「荒樂」と呼んでいる。白河天皇は、行幸が穆王の「荒樂」のようになってしまふのではないかと、危惧しているのである。行幸は莫大な費用がかかり、華美奢侈にも向かいかねない。勝地への遊覧を望んではいるものの、天子としての配慮から、逡巡しているのである。あるいは、民の財産・労力を消費するのを惜しんで、行幸を控える天子の深慮を称えた、同じく新樂府の「驪宮高」（卷四・0145）を念頭に置いているであろうか。「雖有前鑑、奈荒樂何」は、関白左大臣藤原師実や他の臣下への問い掛けであるとともに、自らへの問いでもあるだろう。

（現代語訳）

帝が関白左大臣藤原師実に仰せられたことには、「伝え聞くとところによれば、国中の景勝の地では、大井河にまさる所はなく、京城の名所も、嵯峨野には及ばないとのこと。しばし一日の余暇を利用して、かの地の周囲の眺めを存分に味わいたいものだ。ただ先人の戒めがあつて参考にすることができるけれども、天子の行幸は過度な

遊樂になりがちなのをどうしたら良いであろうか」とのことであつた。

- (3) 勅命未だ畢らざるに、臣しん応たふること先さきんずるが如ごとし。「黄軒が洞庭の遊び、夏后が会稽の会、皆に典章に載るも、誰か荒楽と言はむ。請ふらくは行宮を山辺に占め、方舟を河上に蟻はむことを」といふ。今日の良宴、蓋し斯こに在るなり。

白河天皇の心配に對して、先例を挙げて放埒な遊びにはならないことを述べて不安を打ち消す。そしてその宴の良さを強調する。「勅命」は、天皇の下す命令。ここは帝の言葉の意。

○公家之准「齋会」也、忽降鳳銜之勅命、皇后之臨梵筵也、暫移椒掖之尊儀（『本朝統文粹』卷十二、藤原実綱「法成寺塔供養願文」）

「未畢」は、天皇の言葉がまだ終わらないうちに。「臣」は、天子に對して臣下がへり下つて自分自身を呼ぶ語。ここでは、和歌序の作者源師房。

○先帝知臣謹慎。故臨崩寄臣以大事也（『文選』卷三十七、諸葛孔明「出師表」）

○臣忝非鴻才、誤奉鳳詔（『本朝文粹』卷十一、大江朝綱「早春侍内宴、同賦晴添草樹光。応製」詩序）
「臣応如先」は、自分は天皇がしゃべり終わる前に答えたということ。「黄軒洞庭之遊」以下「蟻方舟於河上」までが、天皇からの問い掛けに對する師房の答え。

「黄軒」は、黄帝軒轅氏の略。中国太古の伝説上の帝王。

○改奢即儉、則合美乎斯干、登封降禪、則齊德乎黄軒。（『文選』卷三、張平子「東京賦」。薛綜注「言光武登上泰山、下禪梁父、則与黄帝軒轅、齊其功德」）

○仰玄鑑以来祗望黄軒之往駕（『菅家文章』卷七、「未旦求衣賦」。『本朝文粹』卷二）

○黄軒膺籙象罔得希世之珎夏禹受圖淮夷輸佳土之貢（『本朝統文粹』卷三、藤原敦光「得宝珠」策問）

「洞庭之遊」は、黄帝が洞庭の野で咸池の楽を奏した遊びを言う。

○莊子曰……又曰、北門成問黄帝曰、帝張咸池之樂於洞庭之野、吾始聞之而懼、後聞之而怠、卒聞之而惑、蕩蕩默默、乃不自得（『芸文類聚』卷六・地部・野）

○洞庭張樂地、瀟湘帝子遊（『文選』卷二十、謝玄暉「新亭渚別范零陵詩」。五臣注「洞庭山名。黄帝奏咸池之樂於上」）

○鳳管鳳絃之調、雅音疑黄軒之張洞野、画龍画鵠之儀、德彩嘲朱檻之泛液池（『本朝統文粹』卷九、藤原義忠「暮春侍宴、同賦花樹遶池岸。応製詩」序）

○巖前木落商風冷、浪上花開楚水清。青草旧名遺岸色、黄軒古樂寄湖声。天曆御屏風詩 菅三品

彼時聞者伝、作者以此句不レ入為愁。判者聞之曰、黄帝張樂於洞庭之野。尤是強文第一、專非詩。作者聞之弥久愁。後代臨終常吐怨詞云々。又故大府卿江匡衡云、坤元録屏風洞庭詩云黄軒古樂之句、維時難云、如莊子成英疏之、天地之間、有洞庭之野。非大湖之洞庭云々、此難頗強難歟。文章有所許歟。或人問云、件事以其詞非詩詞為難歟。被答曰、此為憲案僻事。注千載佳句注也。非件義。只非大湖之洞庭之義也（『江談抄』第四）

「洞庭」は、『文選』の五臣注と『江談抄』にいうとおり、湖の名前ではなく、天地の間にあるという山の名。黄帝が音楽を奏した地としてよく知られていた。「夏后」は、中国太古の帝王の禹王。夏禹。夏王朝を開いた。「后」は、きみ、天子。

○昔者夏后氏、朝群臣於茲土、而執玉帛者以萬國（『文選』卷五、左太冲「吳都賦」。劉淵林注「左伝曰、禹会諸侯於塗山、執玉帛而朝者萬國」）

○夏后入家、子男断足之殃合契、吳王讓國、兄弟晦身之願同符（『本朝文粹』卷三、藤原博文「論運命」策問）

○彼軒皇之称土德焉、熊山之風南暖、夏后之相地宜矣、龍門之月西低（『本朝統文粹』卷十二、藤原敦光「鳥羽院參御熊野山願文」）

「会稽之会」は、禹が会稽の塗山に諸侯を会せしめた故事を言う。

○孔子家語曰、禹会諸侯於塗山、防風氏後至、禹戮之、其骨專車（『芸文類聚』卷八・山部下・会稽諸山）

○朝吾行於湯谷兮、從伯禹乎稽山、嘉群神之執玉兮、疾防風之食言（『文選』卷十五、張平子「思立賦」）
「皆」は、ともにの意。黃帝の遊びと禹の集いを指す。「典章」は、おきて、規則。天子のなすべき事柄を記した書物であろう。あるいはたんに典籍・書物の意に用いているのかもしれない。

○雖明珠兼寸、尺璧有盈、曜車二六、三傾五城、未若申錫典章之為遠也（『文選』卷六、左太冲「魏都賦」）

○宜稽之典章、莫處疎隔（『本朝文粹』卷十二、菅原淳茂「大宰答新羅返牒」）

「荒楽」は、(2)に「奈荒楽何」とある。この二句は、黃帝の遊びと禹の集まりを、だれも気ままな遊樂だと非難してはいないと、天皇の危惧を打ち消している。

「請」以下の二句は、「臣」師房の希望を述べている。「行宮」は、底本が「行官」に作るのを、(蓬)（版）によって改めた。「行宮」は、天皇が行幸する時に、仮に設ける住居。仮宮。觀智院本「類聚名義抄」（法下）の訓には、「カリミヤ」とある。

○鳥策篆素、玉牒石記、鳥イダシ聞梁浪有陟方之館、行宮之基歟（『文選』卷五、左太沖「呉都賦」。李善注「天子行所立、名曰行宮」）

○行宮見月傷心色、夜雨聞鈴腸斷声（『白氏文集』卷十一・0596「長恨歌」。『和漢朗詠集』卷下・恋）

○魏兩主之遊西河、月落行宮之地、唐二帝之宴前殿、燈殘醉鄉之筵（『本朝統文粹』卷九、大江匡房「早夏陪行幸太上皇城南水閣、同賦松樹臨池水。応製詩」序）

・「山辺」は、山のほとり。

○千花苑外韶芳暖、一鳥山辺翠色寒（『千載佳句』上・四時部・春興、解叔禄「長安登望」）

○影映山辺水、枝凋曉後霜（『菅家文章』卷二、「晚秋二十詠」ノ「黄葉」）

「蟻」は、船を整えて漕ぎ出そうとする、舟の準備をする。観智院本『類聚名義抄』（佛下本）の訓に「フナヨソヒ」がある。

- 弭トドメ節羅潭、蟻舟汨渚（『文選』卷六十、顔延年「祭屈原文」。如淳注「南方人謂、整舡向岸曰蟻」）
○蟻船者撰州刺史、尽水陸之珍（『江吏部集』卷中、「暮秋泛大井河、各言所懷和歌序」。『本朝文粹』卷十）

「方舟」は、並べた舟。つなぎ合わせた舟。「方」は、ならべる。『新撰字鏡』（卷十）には、「□並也」とある。観智院本『類聚名義抄』（僧中）の訓に「ナラブ」がある。

○水浮陸行、方舟結駟（『文選』卷五、左太沖「呉都賦」。五臣注「方舟、並舟也」）

○城西勝境一相尋、水上方舟幾動心（『本朝無題詩』卷七、藤原明衡「初冬遊泛西河」）

「河上」は、川のほとり。

○范蠡収責勾踐、乘扁舟於五湖、咎犯謝罪文公、亦遂巡於河上（『和漢朗詠集』卷下・述懷、後漢書）

○小藏山下、大堰河上。（『本朝文粹』卷十一、源道濟「初冬泛大井河、詠紅葉蘆花和歌序」）
師房が望んだのは、山の近くに行在所を設け、並べた舟を川のほとりに用意することであつた。この程度であれば、「荒楽」つまり特別豪華な設えには当たらないと考えたのであろう。

「良宴」は、すばらしい宴。

○今日良宴會、歡樂難具陳。（『文選』卷二十九、「古詩十九首」ノ四）

○良宴之趣、恩旨在斯。（『本朝文粹』卷十、大江朝綱「晚春陪上州大王臨水閣、同賦香乱花難識。応教」序）
「蓋在于斯也」の「斯」を、底本が「期」に作るのを（版）によって改めた。この句は、師房のその日の宴についての見解を述べたもの。宴会のすばらしさは、「荒楽」を捨て去った用意のつましさにあるのだと言う。

○以珍貨供養、以詩篇讚揚。今夜之庚申、蓋在斯而已。（『江吏部集』卷上、「夏夜陪左相府池亭、守庚申、同賦池清知雨晴。応教」詩序）

（現代語訳）

帝の仰せがまだ終わらないうちに、私は先んじて申し上げた。「黄帝の洞庭の野における奏楽の遊びや、夏の禹の会稽での集まりは、ともに天子のなすべき事柄を記した書物に載せてはいるものの、だれがこれを荒楽だなどと言うでしょうか。仮宮を山のほとりに設け、繋いで並べた舟を河畔に用意させていただきとう存じます」と。本日の宴のすばらしさというのは、まさにこの儉しさにあるのだ。